

モンゴル帝国期以降のヨーロッパと ユーラシア世界との交渉

小 澤 実

はじめに

かりにユーラシア大陸の西端に位置する二つの信仰圏、つまりローマを中心とするラテン・カトリック圏とコンスタンティノープルを中心とするギリシャ正教圏という二つのキリスト教圏を中世におけるヨーロッパと考えた場合、この中世ヨーロッパ世界は、その地理的位置ゆえに、たえず異なる宗教や文化を背負う外部勢力と交渉する状態にあった。とりわけ7世紀にアラビア半島で生まれたイスラーム勢力は、その後の歴史を通じてつねにヨーロッパ世界の隣人であり、多様なインパクトをヨーロッパ世界に与え続けた⁽¹⁾。同じ一神教を奉じる両者との関係において特筆すべきは、11世紀末以降に教皇などの呼びかけによって聖地回復を目的とした十字軍運動ならびにアラブ世界の知識を導入しその後のヨーロッパの知的基盤を固めた12世紀ルネサンス運動であろう⁽²⁾。

(1) イスラームとの関係に関する古典的著作は、W. モンゴメリ＝ワット（三木亘訳）『地中海世界のイスラーム ヨーロッパとの出会い』筑摩書房、2008年（原著1972年）、R. W. サザーン（鈴木利章訳）『ヨーロッパとイスラーム世界』岩波書店、1980年（原著1962年）である。最新の関係史として、J. Tolan, G. Veinstein, & H. Laurens, *Europe and the Islamic world. A history*. New Jersey 2012. なお近年、両者の関係を調査するにあたって決定的な意味を持つ基本研究書が刊行された。D. Thomas (ed.), *Christian-Muslim relations. A bibliographical history*. 4vols. Leiden 2009-2012.

(2) 十字軍に関する研究は枚挙にいとまない。Ch. Tyerman, *God's war. A new history of the crusades*. Cambridge, Mass. 2006. イスラーム側との関係に重心を置いた研究として、Paul E. Chevedden, "The Islamic view and the Christian view of the crusades: a new synthesis", *History* 93 (2008), pp. 181-200. 太田敬子『十字

しかしながら13世紀半ば以降のヨーロッパ世界は、隣接するイスラーム世界の先にあるユーラシア世界を急速に意識するようになった。つまり1206年にチンギス・ハンによって建国された遊牧民族国家であるモンゴル帝国は、その後ユーラシア全域へと拡大し、その歴史構造に大きな変化を迫ったからである。ヨーロッパにとって決定的な事件となったのは、ジョチ家のバトゥ率いるモンゴル軍の西征であった。1236年にキプチャク平原の制圧を目的として西方に向かったモンゴル軍は、1237年にはヴォルガ川ぞいのブルガールに達し、その後モスクワをくだし、1240年にはキエフを、そして1241年にはレグニーツアの戦いで東ヨーロッパ連合軍を、シャヨー河畔の戦いでハンガリー王ベーラ4世を敗走させた。これら事件がヨーロッパ側に大きな衝撃を与え、従来の隣人であったイスラーム世界のさらに彼方のモンゴル帝国をはっきりと認識するきっかけとなったことは周知の事実である。

このモンゴル帝国との接触は、中世後期のヨーロッパ世界に対し様々な面において大きな影響を与えることになった⁽³⁾。他方でモンゴル帝国のインパクトが薄れた14世紀なかば以降、今度は小アジアにあらわれたオスマン帝国の存在が、ヨーロッパ世界の展開と認識にとって重要な役割を果たすようになる。ヨーロッパの時代区分で言えば中世後期という時代、ユーラシアにあらわれた二つの帝国とヨーロッパとの交渉は、とりわけ後者の歴史展開にとって本質的な役割を果たすことになる。本稿の目的は、モンゴル帝国の出現以降のユーラシア世界とヨーロッパとの関係にかかわる近年の研究動向を整理し、今後中世

軍と地中海世界』山川出版社、2011年。12世紀ルネサンスに関しては、T.F.X. Noble, "Introduction", in: T.F.X. Noble & J. van Engen (ed.), *European transformations. The long twelfth century*. Notre Dame, In. 2012, pp.1-16; L. Melve, "The revolt of the medievalists". Directions in recent research on the twelfth-century renaissance", *Journal of medieval history* 32 (2006), pp.231-52; R.N. Swanson, *The twelfth-century renaissance*. Manchester 1999.

(3) モンゴル帝国それ自体の歴史はたとえば以下の著作を参照。杉山正明『モンゴル帝国の興亡』2巻、講談社現代新書、1996年。周辺世界を含めた構造的な見取り図として、同「中央ユーラシア歴史構図」『岩波講座世界歴史11 中央ユーラシアの統合』岩波書店、1997年、3-89頁。欧米での研究史は、P. Jackson, "The state of research: the Mongol world-empire, 1986-1999", *Journal of medieval history* 26 (2000), pp.189-210.

ヨーロッパ史家が認識し向かい合うべき研究領域を提示することにある。

1 モンゴルの衝撃からオスマン帝国の衝撃へ

東西交渉史という観点から、現在最も包括的なモンゴル＝ヨーロッパ関係史を私たちに提示するのは、佐口透による著作である⁽⁴⁾。モンゴル帝国史の古典であるドーソンの翻訳者でもある佐口は、モンゴル、漢語、イスラーム、ヨーロッパの史料に目配りをしながら、本書の刊行時である1970年までの各国の研究成果に基づき、西欧・東欧・ロシア・ビザンツ帝国などとモンゴル帝国との関係を丁寧整理している。他方で従来蓄積されてきた歴史的事実を前提としながらも、杉山正明は、モンゴル帝国全体の動向のなかで従来のモンゴル＝ヨーロッパ関係史を見直す必要があることを主張し、とりわけレグニーツァ（ワルシュタット）の戦いの実在性、マルコ＝ポーロの記述の真実性、「タタールのくびき」の実情とロシア社会に与えた影響、そしてそもそも中世ヨーロッパがモンゴル帝国に対してもっていたインパクトの相対化など、ヨーロッパ史の側からも再検証を行うべき問題を提起している⁽⁵⁾。こうしたモンゴル史家による批判的研究とは別の文脈で著された、現在最も包括的なモンゴル＝ヨーロッパ関係史は、P. ジャクソンによるものである。デリー＝スルタン朝の研究者でもあるジャクソンは、モンゴル史ならびにヨーロッパ史双方の研究史の批判的検討と多言語にわたる網羅的な史料の調査を行い、1221年から1410年までの両世界の関係史を、とりわけヨーロッパにとってのインパクトという蓄積ある観点から提示した⁽⁶⁾。従来、欧米における両者の交渉の歴史は史料の

(4) 佐口透『モンゴル帝国と西洋』平凡社、1970年。なお宣教師史料の研究に長年携わってきた研究者による次の概観も参照。海老澤哲雄「西欧とモンゴル帝国」『世界史への問い3 移動と交流』岩波書店、1990年、317-342頁。

(5) たとえば、杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』講談社、2008年、第4章、同「モンゴルの破壊という神話」窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図13～15世紀の東西』総合地球環境学研究所、2010年、63-116頁

(6) P. Jackson, *The Mongols and the West, 1221-1410*. Harlow 2005. なおジャクソンは本書に先立ち、短い概観も執筆している。P. Jackson, "The Mongols and Europe", in: D. Abulafia (ed.), *The New Cambridge Medieval History, vol.5: c.*

多様性から、D. サイナーら中央アジア史家と J. リシャルールらヨーロッパ史家に分離していたために、双方に目配せをしたジャクソンの著作は今後の出発点となるだろう⁽⁷⁾。

以上は総合的な記述であるが、両者の関係については、とりわけヨーロッパの歴史家によって二つの論点が深められてきた。こうした古典的テーマの研究史についてもここで整理しておきたい。

ひとつはヨーロッパ人による商業経路の拡大という論点である。モンゴル帝国の包括的な秩序維持権力が担保する「モンゴルの平和」の結果として、ヨーロッパ商人とりわけジェノヴァとヴェネツィアを出自とする商人集団は、カッファやターナなど黒海の沿岸に商業拠点を建設するとともに、ユーラシア世界へ産品を求めて拡大した⁽⁸⁾。こうしたイタリア商人の東方展開は古典的な中世経済史のテーマであり、未刊行の商業文書を利用した G. I. ブラティアヌヤ M. バラルの著作を⁽⁹⁾、日本においても亀長洋子や大黒俊二らの研究を手

1198-c.1300. Cambridge 1999, pp.703-719. ヨーロッパにとっての対モンゴル史研究は、E. Euler, “Die Begegnung Europas mit den Mongolen im Spiegel abendländischer Reiseberichte”, *Saeculum* 23 (1972), pp.47-58; G.A. Bezzola, *Die Mongolen in abendländischer Sicht, 1120-70. Ein Beiträge zur Frage der Völkerbegegnung*. Bern 1974; F. Schmieder, *Europa und die Fremden. Die Mongolen im Urteil des Abendlandes vom 13. bis in das 15. Jahrhundert*. Sigmaringen 1994; J. Schiel, *Mongolensturm und Fall Konstantinopels. Dominikanische Erzählungen im diachronen Vergleich*. Berlin 2011.

(7) サイナーの著作は、D. Sinor, “Les relations entre les Mongols et l'Europe jusqu'à la mort d'Arghoun et de Béla IV”, in: *Inner Asia and its contacts with medieval Europe*. London 1977, X; Id., “The Mongols and western Europe”, in: *Inner Asia and its contacts with medieval Europe*. London 1977, IX. リシャルールの個別研究は以下の論集に収録されている。J. Richard, *Orient et Occident au moyen âge. Contacts et relations (XII^e-XV^e s.)*. London 1976; Id., *Les relations entre l'Orient et l'Occident au moyen âge. Études et documents*. London 1977; Id., *Croisés, missionnaires et voyageurs. Les perspectives orientales du monde latin médiéval*. London 1983; Id., *Croisades et états latins d'Orient*. Aldershot 1992; Id., *Francs et Orientaux dans le monde des croisades*. Aldershot 2003.

(8) 近年の研究史として有用であるのは、N. di Cosmo, “Black Sea emporia and the Mongol Empire: A reassessment of the *Pax Mongolica*”, in: J. Gommans (ed.), *Empires and emporia: The Orient in world historical space and time / Journal of the economic and social history of the Orient* 53 (2010), pp.83-108.

(9) G. I. Brătianu, *Recherches sur le commerce génois dans la mer Noire au XIII^e*

することができる⁽¹⁰⁾。中世ヨーロッパを13世紀のユーラシア世界システムのひとつのサブシステムと見なすジャネット・アプー＝ルゴドの前近代世界システム論は、このような商業史的関心の上に構築された議論である⁽¹¹⁾。

もうひとつはキリスト教の拡大という論点である。モンゴル帝国は13世紀のヨーロッパにとって衝撃ではあったものの、教皇庁やその意を酌んだ世俗君主はキリスト教世界の拡大の好機とも捉え、プラノ＝カルピニヤモンテ＝コルヴィノら率いるフランシスコ会の宣教団を派遣した。これまでの研究において、彼ら宣教師らによる報告書に基づき現地キリスト教社会の実態や世俗君主らの意図などが論じられてきたが⁽¹²⁾、ここで強調しておくべきはこうした派遣はつねに教皇庁の管理下に置かれていたことである。このような観点に対してはP. ペリオの古典的研究以来、J. リシャールの総論的記述にいたるまで多くの成果を確認することができる⁽¹³⁾。

siècle. Paris 1929; M. Balard, *La Romanie génoise: XII^e-début du XV^e siècle*. 2 vols., Roma 1978. そのほか重要な研究として、L. Petech, “Les marchands italiens dans l’empire mongol”, *Journal asiatique* 250 (1962), pp.549-574.

- (10) 亀長洋子「中世ジェノヴァ人の黒海 多元性のトポスとして」高山博・池上俊一編『宮廷と広場』刀水書房、2002年、大黒俊二「ヴェネツィアとロマニア 植民地帝国の興亡」歴史学研究会編『地中海世界史第2巻 多元的世界の展開』青木書店、2009年、136-169頁。
- (11) J. アプー＝ルゴド(佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳)『ヨーロッパ覇権以前 もうひとつの世界システム』2巻、岩波書店、2001年(原著1991年)。
- (12) ユーラシアにおけるキリスト教に関して、A.C. Moule, *Christians in China before the year 1550*. Cambridge 1930; F. Micheau, “Eastern Christianities (eleventh to fourteenth century): Copts, Melkites, Nestorians and Jacobites”, in: M. Angold(ed.), *The Cambridge history of Christianity: Eastern Christianity*. Cambridge 2006, pp.373-403. ユーロッパ君主との関係は、G. M. Monti, “I re angioni e i Tartari”, in: *Da Carlo I a Roberto di Angiò*. Trani 1936, pp.17-36; L. Lockhart, “The relations between Edward I and Edward II of England and the Mongol Il-khans of Persia”, *Iran* 6 (1968), pp.23-31; J.A. Boyle, “The Il-khans of Persia and the princes of Europe”, *Central Asiatic Journal* 20 (1976), pp.25-40.
- (13) 古典的研究として、P. Pelliot, *Les mongols et la papauté*. Paris 1923. Ch. Dawson, *The Mongol mission. Narratives and letters of the Franciscan missionaries in Mongolia and China in the thirteenth and fourteenth centuries*. London 1955; I de Rachewiltz, *Papal envoys to the Great Khans*. London 1971; J. Muldoon, *Popes, lawyers, and infidels. The Church and the non-Christian world 1250-1550*. Liverpool 1979; K.-E. Lupprian, *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihres*

14世紀後半にヨーロッパに対するモンゴル帝国のインパクトが収束したのち、外部異教国家としてヨーロッパに大きな影響を与えることになったのはオスマン帝国であった⁽¹⁴⁾。ブローデルが活写する近世地中海世界におけるオスマン帝国の繁栄の前段階としての、14世紀以降におけるオスマン帝国とヨーロッパの関係の包括的な手引きとしてC. カファダルの研究をあげておきたい⁽¹⁵⁾。他方でオスマン史、ビザンツ史、ヨーロッパ史とりわけヴェネツィア史やハプスブルク史においてもそれぞれがもつ史料と研究蓄積に応じたアプローチもまた定期的に試みられている⁽¹⁶⁾。

2 五つの論点

本節では13世紀以降のヨーロッパとユーラシア世界との関係において、より個別的な五つの論点をとりあげ、近年の研究成果を整理しておきたい。

(1) ユーラシア認識の深化と拡大

すでに述べたように、モンゴルの登場とそれとの接触がヨーロッパの知的階層に与えた影響は大きい。とりわけ従来の研究においては終末論的な文脈でモンゴル人を理解し、たとえばマシュー・パリス『大年代記』にみられるように、彼らが引き起こした「恐怖」がどのようにテキストや写本挿絵に表象されたのかを論じること中心的なテーマであった⁽¹⁷⁾。しかしながら「恐怖」という感情

Briefwechsels. Città del Vaticano 1981. リシャルの概観は、J. Richard, *La papauté et les missions d'Orient au moyen âge (XIII^e-XV^e siècles)*. Roma 1998.

(14) オスマン帝国について、林佳世子『オスマン帝国 500年の平和』講談社、2008年。

(15) C. Kafadar, "The Ottomans and Europe", in: J. Thomas A. Brady, H. A. Oberman & J. D. Tracy (eds.), *Handbook of European history 1400-1600. Late middle ages, Renaissance and Reformation, vol. 1: Structure and assertions*. Leiden 1994, pp.589-632. 日本語著作として、新井政美『オスマン vs ヨーロッパ』講談社、2002年。

(16) たとえば K. Fleet (ed.), *The Cambridge history of Turkey, vol.1: Byzantium to Turkey, 1071-1453*. Cambridge 2009; J. Shepard (ed.), *The Cambridge history of Byzantium*. Cambridge 2010.

(17) J. J. Saunders, "Matthew Paris and the Mongols", in: T.A. Sandquist & M.R.

カテゴリーにとらわれることなく、モンゴル帝国をはじめとする未知の世界への関心が、ヨーロッパ人のユーラシアなど未知の空間に対する認識のレベルを向上させたとする議論を展開するのはJ. フリートである⁽¹⁸⁾。

このような観点を私たちが認めるとするならば、従来利用されてきた記述史料は読みなおされる必要があるだろう。教皇庁が派遣した宣教師らによる一連の報告書もそうであるし⁽¹⁹⁾、彼らに引き続き東方世界での記録をヨーロッパにもたらしたハンス・シルトベルガー、クラヴィーホ、ソルダニアのジョヴァンニなども検討に値する⁽²⁰⁾。ここで問われるべきは、当該史料の記述のどの部分が事実であるかと言うよりも、それがヨーロッパにおいてどのように解釈されたかという受容史的側面にある。たとえばプラノ＝カルピニの報告書には、モンゴル側の軍事力にかかわる情報にかなりの紙幅が与えられている⁽²¹⁾。これはプラノ＝カルピニや派遣指示を与えた教皇庁がモンゴル帝国のどの部分に関心を持っていたのか、つまりモンゴル帝国と今後接触していく上でどのような交渉のあり方の選択肢があるのかを示唆している。より具体的に言えば、モンゴル帝国が敵対者として再度立ち現れた場合、ヨーロッパ側としてどのような戦術を組みうるかということ想定して、情報収集をしていたと読み解くことは

Poweick (eds.), *Essays in medieval history presented to Bertie Wilkinson*. Toronto 1969, pp.116-132.

(18) J. Fried, "Auf der Suche nach der Wirklichkeit: Die Mongolen und die europäische Erfahrungswissenschaft im 13. Jahrhundert", *Historische Zeitschrift* 243 (1986), pp.287-332.

(19) プラノ＝カルピニに関して、F. Schmieder, *Johannes von Plano Carpini, Kunde von den Mongolen 1245-1247*. (Fremde Kulturen in Alten Berichten 5). Sigmaringen 1997. リュブルクに関して、P. Chiesa (ed.), *Guglielmo di Rubruk, Viaggio in Mongolia*. Roma-Milano 2011; P. Jackson (ed.), *The mission of friar William of Rubruck. His journey to the court of the Great Khan Möngke, 1253-1255*. Indianapolis 1990; C.R. Kappler (ed.), *Voyage dans l'empire Mongol 1253-55. Guillaume de Rubrouck*. Paris 1985.

(20) この分野の第一人者による著作として、フォルカー・ライヒェルト（井本响二・鈴木麻衣子訳）『世界の発見 中世後期における旅と文化的出会い』法政大学出版局、2005年（原著2001年）。本書の他にも、F. Reichert, *Begegnungen mit China: die Entdeckung Ostasiens im Mittelalter*. Sigmaringen 1992; F. Reichert (ed.), *Quellen zur Geschichte des Reisens im Spätmittelalter*. Darmstadt 2009.

(21) 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、1965年、41-63頁。

可能かもしれない。

他方で近年急速に研究が進展したのは世界図の分野である。とりわけマップ・ムンディとよばれる世界図は、本来聖書の歴史観を視覚化する図像テキストであったが、モンゴル帝国との接触に前後して具体的な情報が詳細に描き込まれるようになり、同時代人の世界認識を反映したものとなった。こうした中世世界図の研究は1980年代以降急速に進展し、シカゴ大学出版局による「地図製作の歴史」という大部の論集にくわえて²²⁾、P. ゴーチエ＝ダルシェ、A. D. フォン・デン・ブリンケン、E. エドソン、I. バウムガルトナーらによる精力的な個別研究、そして叢書「*Terrarum orbis*」の刊行など活況を呈している²³⁾。14世紀後半にマヨルカ島のアブラハム・クレステスの工房で作製されたカタラン・アトラスや15世紀後半のフラ・マウロの世界図のように、マップ・ムンディという西洋中世の世界観の表象のなかにどのようにユーラシア世界が取り込まれていたのかというアプローチは、ヨーロッパ人の空間認識をはかるひとつの指標となるかもしれない²⁴⁾。

22) J.B. Harley, & D. Woodward (eds.), *Cartography in prehistoric, ancient, and medieval Europe and the Mediterranean* (The history of cartography 1). Chicago & London 1987; D. Woodward (ed.), *Cartography in European renaissance* (The history of cartography 3). 2 vols. Chicago & London 2007.

23) パトリック・ゴーチエ＝ダルシェ (永田弘道訳) 「中世における地図表象 コンテキストと機能」佐藤彰一編『歴史・地図テキストの生成』名古屋大学大学院文学研究科, 2007年, 79-85頁。A. -D von den Brincken, *Studien zur Universalkartographie des Mittelalters*. Göttingen 2008. E. Edson, *The world map 1300-1492. The persistence of tradition and transformation*. Baltimore 2007; I. Baumgärtner, "Weltbild und Empirie. Die Erweiterung des kartographischen Weltbilds durch die Asienreisen des späten Mittelalters", *Journal of medieval history* 23 (1997), pp.227-57; Id., "Weltbild, Kartographie und geographische Kenntnisse", in: J. Fried & E.-D. Hehl (eds.), *WBG Welgeschichte, vol. 3: Weltdeutung und Weltreligionen 600 bis 1500*. Berlin 2010, pp.57-83. *Terrarum orbis* は、ゴーチエ＝ダルシェが編集主幹を務め、Brepols社から出版される前近代世界図研究のシリーズである。

24) カタラン・アトラスの刊本は、G. Grosjean (ed.), *Mappamundi, the Catalan atlas of the year 1375*. New York 1978. フラ・マウロの世界図の刊本は、Piero Falchetta (ed.), *Fra Mauro's world map: with a commentary and translations of the inscriptions*. Turnhout 2006.

(2) 異言語・異文化コミュニケーション

ユーラシアの諸民族とヨーロッパとの交渉において、利用される言語は大きな問題となる。教皇使節や商人は、自身が意思疎通できる場合は別として、現地の言語に通曉する通訳者を一行の中に雇用するのが通常であった。しかし通訳の問題は、両世界のコミュニケーションの諸相を論じるにあたってきわめて重要な論点であるにもかかわらず、先行研究はD. サイナーなどごくわずかしかない²⁵⁾。

この問題にアプローチするためには、近年校訂された複数言語からなる14世紀の辞書に注目すべきである。一つはイエメンを支配していたラスール朝のもとで作製され、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語、モンゴル語、ギリシャ語、アルメニア語を対訳した『王の辞書』である²⁶⁾。もう一つはヴェネツィアのマルチアーナ図書館に所蔵されている『クマン写本』である²⁷⁾。この写本は二つの異なる部分から構成されており、前半はおそらく商人のためにラテン語の単語をキプチャク語やペルシャ語に翻訳し、後半は宣教師のためにキプチャク語の祈祷文をラテン語と中高ドイツ語に翻訳している。現在に伝わる現物や写本は限られているが、ユーラシア世界との交渉の中で、こうした実用的な辞書は数多く作製されたと想定しても間違いではあるまい。従来言語学者の研究対象であったこのような辞書は、それぞれどのような状況で用いられたのか、またどのような分野の単語が採録されているのかといった歴史学的な問いをたてるとするならば、ヨーロッパ世界とユーラシア世界との交渉の具体相を究明する

²⁵⁾ D. Sinor, "Interpreters in medieval Inner Asia", *Asian and African Studies: Journal of the Israel Oriental Studies* 16 (1982), pp.293-320; F. Schmieder, "Tartarus valde sapiens et eruditus in philosophia. La langue des missionnaires en Asie", in: *L'étranger au moyen âge. Actes du XXX Congrès de la SHMESP (Göttingen, 1999)*. Paris 2000, pp.271-281.

²⁶⁾ P.B. Gordon (ed.), *The King's Dictionary. The Rasulid Hexaglot* (Handbook of Oriental Studies VIII-4), Leiden 2000.

²⁷⁾ V. Drimba (ed.), *Codex Cumanicus*. Bucarest 2000. この写本を扱った研究集会の報告書として、F. Schmieder & P. Schreiner (eds.), *Il Codice Cumanico e il suo mondo. Atti del colloquio internazionale, Venezia, 6-7 dicembre 2002*. Roma 2005.

にあたって貴重な歴史学の史料となるのではないだろうか⁽²⁸⁾。このようなコミュニケーションの問題は、グルジア王国やアルメニア王国のようにユーラシア世界とヨーロッパ世界の境域に位置し、両世界の仲立ちの役割を果たしていた国家の歴史的意義をはかるためにも必要なことである。

(3) 想像世界としての東方

モンゴルとの交渉は、具体的な情報の蓄積によるヨーロッパ側の世界認識の深化を促す一方で、ユーラシア世界に対する想像力の拡大をももたらした⁽²⁹⁾。逆説的ではあるが、12世紀のプレスター・ジョン伝説によって増幅された「東方」がもつ異国情緒性は、具体的な見聞情報や産品がユーラシアからもたらされる過程において、ヨーロッパ人の好奇心により深く訴えかけるようになった⁽³⁰⁾。

そのような観点を理解するために最も適切な史料はマルコ・ポーロの著作である⁽³¹⁾。彼の著作内の情報が事実を反映しているかどうか、またそもそもマル

(28) F. Schmieder, “Pragmatisches Übersetzen. Texttransfer zum Nutzen von Handel und Mission”, in: K. Herbers & N. Jaspert (eds.), *Grenzüberschreitungen im Vergleich. Der Osten und der Westen des mittelalterlichen Lateineuropa* (Europa im Mittelalter 7). Berlin 2007, pp.261-275.

(29) P. Jackson, “Christians, barbarians and monsters: the European discovery of the world beyond Islam”, in: J. Nelson & P. Linehan (ed), *The medieval world*. London 1999, pp.93-110; P. Jackson, “Medieval Christendom's encounter with the alien”, *Historical Research* 74 (2001), pp.347-369; J. Richard, “Voyages réels et voyages imaginaires, instruments de la connaissance géographique au Moyen Âge”, in: J. Richard, *Croisés, missionnaires et voyageurs. Les perspectives orientales du monde latin medieval*. London 1983, XX.

(30) プレスター・ジョンの史料翻訳は、池上俊一訳『東方の驚異』講談社、2009年。また池上による次の著作も参照。池上俊一『中世幻想世界への招待』河出書房新社、2012年。基本文献として、C.F. Beckingham & B. Hamilton (eds.), *Prester John, the Mongols and the Ten Lost Tribes*. Aldershot 1996.

(31) マルコ・ポーロに関する研究は枚挙にいとまない。近年の翻訳として、月村辰男・久保田勝一訳『マルコ・ポーロ 東方見聞録』岩波書店、2011年。P. Jackson, “Marco Polo and his Travels”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 68 (1998), pp.82-101. 日本語で読めるものとして、ジョン・ラーナー（野崎嘉信・立崎秀和訳）『マルコ・ポーロと世界の発見』法政大学出版局、2008年（原著1999年）。

コ・ポーロは存在したのかどうかという問題とは別に、ヨーロッパにとって重要であるのは、ポーロの著作が与えた情報がヨーロッパ人の想像世界をゆたかにし、その想像世界がヨーロッパで共有される状況を生み出したことである。R. ウィットカウアーが論じたように挿絵の問題も含め、ポーロの写本がいかに生産され読まれたかという受容史という観点からの研究が今後進められるべきである³²。くわえて想像世界は多くの人々が実際に見聞できない「東方」という概念に付加価値をもたらすことになった。王侯は、「東方」から移入された産品を奢侈品として宮廷に取り込み、それらを他の身分などとの差異化要素としていかに機能させたかという観点の研究も確認することができる³³。

(4) ヨーロッパ意識の増大

周知のように、「ヨーロッパ」という概念は本質主義的なものではなく時代に即して含意を変更する構築物である。この概念は古代地中海世界において世界を構成するエウロパ・アジア・アフリカという三つの大陸の一つとして出現し、キリスト教的世界観の浸透にともなって、古典古代世界においては持ち得ていた自己意識の投影対象とはズレを生じるようになった³⁴。D. ヘイが論じたように、地理的ヨーロッパ世界が、従来の「キリスト教世界」のかわりに「ヨーロッパ」という共同体意識をもつようになったのは中世後期となってからである³⁵。これはヨーロッパという枠組みを論じるにあたってきわめて重

(32) R. ウィットカウアー「マルコ・ポーロと〈東方の驚異〉の絵画的伝統」R. ウィットカウアー（大野芳材・西野嘉章訳）『アレゴリーとシンボル 図像の東西交渉史』平凡社、1991年、142-170頁、大黒俊二「『東方見聞録』とその読者たち」樺山紘一編『岩波講座世界歴史12 遭遇と発見』岩波書店、1999年、63-87頁。

(33) K.-H. Spieß, "Asian objects and western European court culture in the middle ages", in: M. North (ed.), *Artistic and cultural exchanges between Europe and Asia, 1400-1900. Rethinking markets, workshops and collections*. London 2010, pp.9-28.

(34) その一方で初期中世以降、古代以来のエウロパ・アジア・アフリカという三大陸観を反映した世界図であるT O図が知識人の間で流布していた事実は興味深い。初期中世以来の世界図に関しては、B. Englisch, *Ordo orbis terrae: die Weltsticht in den Mappae mundi des frühen und hohen Mittelalters*. Berlin 2002.

(35) D. Hay, *Europe. The emergence of an idea*. 2 ed. Edinburgh 1968.

要な現象であり、近年K. ヘルバースやK. オシェーマが研究を発表している³⁶⁾。

このようにヨーロッパという自己と他者を区別する自意識が中世後期において増大する要因をすることは重要である。理由はおそらく内的な側面と外的な側面のふたつある。内的な要因は教皇庁の組織的拡大ならびにその正統性を担保する理論構築である。11世紀以来、教皇庁は「コンスタンティヌスの寄進状」などのテキストを根拠として世俗世界に干渉するようになると同時に、教会法の整備、教皇権の正統性の理論化、教皇特使の派遣、ロタ法院における教会問題の法的問題解決など通じて、キリスト教世界全域にその権威を認めさせる試みを持続した。つまるところ教皇庁を核として、ヨーロッパ世界は一体感を獲得しつつあったのである。この点に関してはG. バラクロウやR. サザーンといった古典に加えて³⁷⁾、A. パラヴィチーニ=バリアーニやK. ヘルバースらの研究が参考になる³⁸⁾。他方で外的な要因はモンゴル帝国やオスマン帝国といった他者による圧迫である³⁹⁾。とりわけこの問題が明確にあらわれるのは

³⁶⁾ K. Herbers, “Europa und seine Grenzen im Mittelalter”, in: K. Herbers & N. Jaspert (ed.), *Grenzräume und Grenzüberschreitungen im Vergleich. Der Osten und der Westen des mittelalterlichen Lateineuropa*. Berlin 2007, pp.21-41; K. Oschema, “L’idée d’Europe et les croisades (XI^e-XV^e siècles)”, in: B. Guenée & J.-M. Moeglin (ed.), *Relations, échanges et transferts en Occident au cours des derniers siècles du Moyen Âge. Hommage à Werner Paravicini*, Paris 2010, pp. 51-86; Id., “Europa in der mediävistischen Forschung - eine Skizze”, in: R. C. Schwinges, Ch. Hesse, & P. Moraw (eds.), *Europa im späten Mittelalter. Politik - Gesellschaft - Kultur*. München 2006, pp.11-32; Id., “Der Europa-Begriff im Hoch- und Spätmittelalter. Zwischen geographischem Weltbild und kultureller Konnotation”, *Jahrbuch für europäische Geschichte* 2 (2001), pp. 191-235. なお K. Oschema, *Bilder von Europa im Mittelalter*. Ostfildern 2013が予定されている。

³⁷⁾ G. バラクロウ (藤崎衛訳)『中世教皇史』八坂書房、2012年 (原著1968年)、R. W. サザーン (上條敏子訳)『西欧中世の社会と教会 教会史から中世を読む』八坂書房、2007年 (原著1970年)。

³⁸⁾ A. Paravicini-Bagliani, “Il papato medievale e il concetto di Europa”, in: Gh. Ortalli (ed.) *Storia d’Europa, vol.3: Il Medioevo, secoli V-XV*, Torino 1994, pp. 819-845; K. Herbers, *Geschichte der Papsttum im Mittelalter*. Berlin 2012.

³⁹⁾ N. Bisaha, *Creating east and west. Renaissance humanists and the Ottoman Turks*. Philadelphia, Penn. 2006; M. Meserve, *Empires of Islam in Renaissance historical thought*. Cambridge, Mass. 2008.

エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ、のちの教皇ピウス2世の著作である。15世紀末に教皇という普遍権威にして人文主義者でもあった彼の著作はいまなお十分に検討されたとは言いがたいが、彼が着想を得た15世紀イタリアの知的状況も含めて総合的に検討されるべきであろう⁽⁴⁰⁾。

(5) ギリシャ正教圏の問題

かつて等閑視されていた後期ビザンツ帝国の研究は、近年活性化しつつある⁽⁴¹⁾。とりわけ文化交渉という文脈においてみた場合、パレオロゴス朝ビザンツ帝国ではきわめて興味深い現象を認めることができる。それは前時代より継承したヘレニズム文化を高度に発達させたパレオロゴス朝ルネサンスと呼ばれる文化復興を現出させ、次世代そして異文化圏に伝える役割を果たしたからである。1453年のオスマン帝国によるコンスタンティノーブル占領と相前後して多数の知識人が亡命し、とりわけイタリア・ルネサンスの基盤を作ったことはよく知られている⁽⁴²⁾。他方でユーラシアという文脈で興味深いのは、オスマン帝国への知識の伝承である。この問題で関心をひくのはゲオルギオス・アミルゼスである⁽⁴³⁾。この人物は1453年以降、オスマン帝国の宮廷に残り、古典の知識をメフメト2世に教授した。イタリア・ルネサンスの影に隠れて論じられることはほとんどないが、ビザンツ帝国の知識が異文化世界であるオスマン帝国

(40) ピウス2世の本格的な検討はまだなされていないように思われる。O. Mercan, *Constructing a self-image in the image of the other: Political and religious interpretations of pope Pius II's letter to Mehmed II(1461)*. MA thesis: Central European University, Budapest 2008; Z. von Martels (ed.), *Pius II: El Piu Expeditivo Pontifice: Selected studies on Aeneas Silvius Piccolomini (1405-1464)*. Leiden 2003.

(41) J. Richard, "Byzance et les Mongols", *Byzantinische Forschungen* 25 (1999), pp.83-100. A. Laiou & C. Morrisson (eds.), *Le monde byzantine, III: L'Empire grec et ses voisins, XIII^e-XV^e siècle*. Paris 2011; N. Necipoğlu, *Byzantium between the Ottomans and the Latins. Politics and society in the late Empire*. Cambridge 2009;

(42) 研究は枚挙にいとまない。D.J. Geanakoplos, *Constantinople and the West. Essays on the late Byzantine (Paleologan) and Italian Renaissance and the Byzantine and Roman churches*. Madison, Wisconsin 1989.

(43) J. Monfasani, *George Amiroutzes: The philosopher and his tractates*. Louven 2011.

で継承されたという事実は、今後より深く追求されていくべきだろう⁽⁴⁴⁾。

ロシア中世史家の間では、モンゴル帝国によるロシア支配により、ロシアは歴史的な発展段階をとどめられ、その後の歴史展開に否定的な影響を与えたという見解が主であったように思われる。この点を巡ってはロシア史家とモンゴル史家の間で見解の相違があり、いまなお論争が決着しているようには見えない⁽⁴⁵⁾。ロシアはその政治地理学的な位置ゆえに、ギリシャ正教世界の一部を構成しながら、ラテン・カトリック世界とユーラシア世界双方から絶えず接触を受ける地域であった。そのような状態の中で一国史的理解は困難であるとの認識から、近年、諸民族の回路としての役割をロシアに担わせ、そのような文脈の中でモスクワ国家の成立にアプローチする研究もでてきている⁽⁴⁶⁾。このような研究に刺激を受け2009年に北海道大学スラブ研究センターで開催された「北西ユーラシア歴史空間の再構築」も、ロシアの歴史的展開を周囲の世界との関係から見直そうとの試みである⁽⁴⁷⁾。

3 ユーラシア史のなかの中世ヨーロッパ

以上、モンゴル帝国期以降のユーラシア世界とヨーロッパの交渉について今後深めていくべき論点を、筆者の関心にしたがって五つの観点からまとめてきた。もちろん、本稿でおこなった筆者の整理は、すべての研究動向を押さえてのものではなく、そういった意味においては重大な論点を見逃している可能性

(44) メフメト2世の宮廷におけるヨーロッパ知識の伝承は、アンドレ・クロー（岩永博他訳）『メフメト2世 トルコの征服王』法政大学出版局、1998年（原著1990年）、170-175頁。また、L.T.Darling, “The Renaissance and the Middle East”, in: G. Ruggiero (ed.), *A companion to the worlds of the Renaissance*. Oxford 2002, pp.55-69.

(45) ロシア史側の見解として、栗生澤猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の歴史』東京大学出版会、2007年、第7章。

(46) D. Ostrowski, *Muscovy and the Mongols. Cross-cultural influences on the steppe frontier, 1304-1589*. Cambridge 1998.

(47) 記録は、『シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』名古屋、2010。なお本報告書は大幅改稿の上、来年度中に刊行される予定である。

は大いにある。しかしそれを承知の上で次の段階の議論に進みたい。

本稿では、ヨーロッパとユーラシア世界の接点として、13世紀後半から16世紀初頭という限定された期間におこった出来事を行論に乗せてきた。すでに確認したように、この時期は、中世後期から近代初頭というヨーロッパにとって拡大の時代であり、その意味において、上記五つの論点は、この中世後期という時代に特有の歴史現象に関わる問題であると言える⁽⁴⁸⁾。しかしながら突如として両世界の交渉がはじまったわけではない。

モンゴル帝国との接触が、13世紀当時進展していた商業革命ならびにキリスト教世界の拡大を後押しし、それがヨーロッパ世界の拡大につながっていたことはすでに述べた。しかしながらヨーロッパにとっての他者はモンゴル帝国やオスマン帝国だけではない。5世紀におけるフンの侵入以来、ヨーロッパは、イスラーム勢力は言うまでもなく、フン人、アヴァール人、マジヤール人、クマン人のような遊牧民族とも接触し、その接触はヨーロッパ世界の形成に大きなインパクトを与えてきた⁽⁴⁹⁾。アブー＝ルゴドラが想定した「モンゴルの平和」のもとでの交易ネットワークも突如として完成されたものではなく、初期中世以来、時代ごとの転換を経験しながら構築されてきたものであることは、M. ロンバルドによる古典的研究やM. マコーミックの大部の著作から明らかであろう⁽⁵⁰⁾。ローマ時代のパレスチナで誕生したキリスト教も、その拡大はただ西方にのみ向いていたわけではなく、様々なセクトを生み出しながら、ユー

(48) J.R.S. Phillips, *The medieval expansion of Europe*. Oxford 1998.

(49) とりわけパンノニア平原という諸民族の交差点を抱えたハンガリーの歴史家による研究が多い。カタリン・エッシュェー／ヤロスラフ・レベディンスキー（新保良明訳）『アッティラ大王とフン族「神の鞭」と呼ばれた男』講談社、2012年、I. Vásáry, *Cumans and Tatars. Oriental military in the pre-Ottoman Balkans 1185-1365*. Cambridge 2005; N. Berend, *At the gate of Christendom. Jews, Muslims and pagans in medieval Hungary, c.1000-c.1300*. Cambridge 2001.

(50) M. Lombard, *L'Islam dans sa première grandeur, VIII^e-XI^e siècle*. Paris 1971; Id., *Monnaie et histoire d'Alexandre à Mahomet* (Études d'économie médiévale 1). Paris 1971; Id., *Espaces et réseaux du haut moyen âge*. Paris 1972; Id., *Les métaux dans l'ancien monde du V^e au XI^e siècle* (Études d'économie médiévale 2). Paris 1974; Id., *Les textiles dans le monde musulman du VII^e au XII^e siècle* (Études d'économie médiévale 3). Paris 1978; M. McCormick, *The origins of European economy, 300-900*. Cambridge 2001.

ラシア世界を東漸し、中央アジア、インド、中国においても豊かな文化を生み出したことも想起されるべきである⁵¹⁾。モンゴル期以降が特別の条件や重要性をもつことは認めるとしても、モンゴル帝国やオスマン帝国というユーラシアの巨大帝国とヨーロッパの関係もまた、初期中世以来のユーラシア史のなかに置き直されるべきものであるように思われる⁵²⁾。

(51) J. Walker, "From Nisibis to Xi'an: the church of the East in late antique Eurasia", in: S.F. Johnson (ed.), *The Oxford Handbook of Late Antiquity*. Oxford 2012, pp.994-1052. より広い観点から、R. C. フォルツ (常塚聡訳) 『シルクロードの宗教 古代から15世紀までの通商と文化交流』 教文館、2003年 (原著1999年)。

(52) 中世ヨーロッパ史においてこのような試みははじまったばかりである。M. Borgolte, "Mittelalter in der größeren Welt. Eine europäische Kultur in globaler Perspektive", *Historische Zeitschrift* 295 (2012), pp.35-61. 具体的叙述として、P. Sarris, *Beyond the Jade Gate: Western Eurasia from Attila to Columbus* が予定されている。他方でこのような構想は、佐藤彰一『中世世界とは何か』岩波書店、2008年や小澤実「後書きにかえて」小澤実編『物語るロマネスク靈性』クリオの会、2008年、153-167頁でも提示されている。軍事の観点から中世ヨーロッパとユーラシアの関係を論じるのは、堀越宏一「中世ヨーロッパにおける騎士と弓矢」児嶋道裕編『武士と騎士 日欧比較中近世史の研究』思文閣出版、2010年、55-88頁。